

小学校外国語科（英語）における意欲を高める授業づくり

－ 学習に対する児童のニーズを重視した指導の視点から －

学習開発分野(19220904) 奥山 智晶

本研究は、児童の英語学習に対するニーズに焦点を当てた指導が、英語学習に対する児童の意欲向上に繋がるという指導の有用性について、先行研究の検討や授業実践を通じた分析を行い、ニーズと学習意欲の関連性を明らかにすることを目的とする。その結果、教師として、一人一人に応じたニーズの把握に努めることの重要さと共に、学習意欲の解釈の複雑さ、ニーズの生かし方の困難さも明らかになった。

[キーワード] 小学校英語, 授業づくり, 学習者ニーズ, 学習意欲

1 はじめに

(1) 問題の所在

次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ(2016)では、現行学習指導要領において指導改善による成果は認められるものの、児童生徒の学習意欲に関わる課題があると述べている。今井(2018)は、児童らの英語体験学習の量や質も毎年変化するため、児童の力量を把握して授業内容や方法の変更や改善が必要だと論じている。北尾(2020)は、小学生初期には、感情的な内発的動機づけが多いが、学年が上がると知的好奇心や探究心などの認知的な興味を持つようになると述べている。一方で、学年が上がると内発的動機づけが低下してしまう課題に対し、感情から認知レベルへの移行に原因があると指摘している。そのため、知的好奇心や探究心に重点を置いた学習を行うことにより、内発的動機づけを質的に高める指導的配慮が必要であると論じている。以上の記述から、学習に対する意欲を高める工夫が必要であり、そのために学習者の実態、特に学習者自身の願いや求めを取り入れた指導が必要ではないかと考える。つまり、教師は、児童一人一人のニーズを把握し「学習を通してどのような姿になりたいのか」という児童の実態を理解した上で、学習活動を組み立てていくことが必要である。そのため、これまでのような一斉授業のみならず、児童個々の実態に応じた指導が有効ではないかと考える。さらに、今井と北尾の論より、小学校高学年の英語学習において、学習者のニーズを取り入れることは、外国語科における知的好奇心や探究心など認知的な興味を児童にもたせることに繋がる可能性があると考えられる。

前年度の研究において、阿濱ほか(2018)などの論を踏まえ、奥山(2020)はニーズを「学習者自身

が何を学びたいか、また、既知知識、これまでの学習経験や教育歴に照らし合わせ、どのような学びを要求しているのか。」と定義し、指導に取り入れる重要性を明らかにした。しかし、検討した指導の在り方が英語学習に対する児童の意欲の向上に影響するのか検証できていなかった。そのため、改めて学習意欲について整理し、児童のニーズを取り入れた授業実践を行うことで児童の学習意欲にどのような影響があるのかを分析し考察することが必要であるという課題が生じた。

(2) 研究の目的

本研究では、以下三点を目的とする。

一点目は、学習意欲の捉え方を明らかにすることである。二点目は、アンケート調査を行い児童のニーズを把握した学習意欲を高めるための授業実践を行うことである。三点目は、授業実践を通して、特徴的な抽出児の言動を分析することで、ニーズの把握が学習意欲の向上に寄与するのかを明らかにすることである。

2 学習意欲の検討

(1) 学習意欲について

下山・林(1983)は、「種々の動機の中から学習への動機を選択してこれを目標とする能動的意志活動を起こさせるもの」として学習意欲を定義している。また、真田ら(2014)は、「学習活動を生じさせる内的な動機から、学習態度として表れる現象面まで広く捉え、『学習への動機を選択して、それを実現しようとする欲求・意思』と学習意欲を定義している。下山・林と真田らの論より、学習意欲に関して「学習者自身が学習への動機を選択して、目標として実現しようとする」という共通点

が明らかになった。鹿毛(2015)は、学習意欲について『学習意欲』を日常用語として説明するならば、それは『学習に対する意欲』を指す言葉であり、『学びたい』という欲求や『学習を成し遂げよう』とする意志に根ざした『積極的に学ぼうと思う気持ち』を意味しているといえるだろう」と述べている。また、桜井(2004)は、学習意欲について大きく三点に分類して論じている。一点目は、「内発的動機づけ」で、学習の自発性、学習それ自体が目標になっている(学習それ自体が面白い)意欲のことである。二点目は、「外発的動機づけ」で、学習の外発性、学習それ自体は手段となっている(人から言われて仕方なく学習する)意欲のことである。三点目は、「無気力」で、やろうと思えば学習ができる状態にあるものの、何かしたいという気持ちがわいてこない状態のことであると述べている。

鹿毛(2008)は、学習意欲には「パーソナリティ意欲」「文脈意欲」「状況意欲」の3水準があると述べている。①パーソナリティ意欲は、個人に内在する特質としての安定的な意欲の在り方である。②文脈意欲は、学習内容や活動領域のような文脈によって様相の異なる意欲のことである。③状況意欲は、現在進行形の時間の中で意欲が立ち現れる意欲のことである。これら三つは相互に関連し合っているため、ある一つの側面だけを切り取って学習者の意欲の高低を判断することは難しいと論じている。さらに学習意欲を規定する要因として、「欲求」、「認知」、「感情」、「環境」という4要素も動機づけメカニズムに関わっていると述べている。よって、学習意欲とは4つの要素が3つの水準で相互作用を起こす複雑な仕組みと働きをもった心理現象であると鹿毛は論じている。

また、学習意欲について奈須(1996)は、外部から導入された場面ではあるが、そこへの参加は少なくとも心理的には自己決定がなされている場合があると論じている。外発的な要因によって学習に参加していたとしても、「分別」という働きにより、「価値の内面化」が行われ、学習を進めていくうちに面白さを発見し、内発的意欲による学習が展開されると奈須は述べている。つまり、学習者が学習対象に面白さや魅力を感じていなくとも、指導者は学ぶ面白さや価値の発見へと学習者を導き、価値の内面化を促すような指導を求められているということである。

これらの論より、本研究では学習意欲を「学習者が学習それ自体を目標とし、学習を成し遂げようという意志に根ざした、自発的・能動的に学習に取り組み学ぼうとする気持ち。」と定義する。さらに、指導の留意点として以下二点を挙げる。一

点目は、外発的意欲であっても、学習を進める中で価値の内面化が行われると、内発的意欲による学習へと変化するものである。二点目は、学習意欲は複雑な仕組みと働きをもち、変容を把握するためには学習者の心理状況を慎重に理解することが必要となるものである。

3 アンケート調査の概要

(1) ニーズの把握

奥山(2020)は、児童の英語に関わる経験、今後の英語学習においてやってみたいこと、4技能¹⁾等の資質・能力に関する得意度、などを尋ねるアンケートを実施し、ニーズの把握と整理を行った。さらに、整理して明らかになった児童の特徴をもとに、表1のアンケート項目の「1, 4, 5」を利用し、表2のように8つのタイプに再整理した。児童の英語学習に対するニーズとして、一人一人の好みや要望が異なっており、その中でも4技能それぞれへの要望が見られた。授業実践における単元について後述の4章で詳しく記述するが、これらのニーズを踏まえた授業を構想し実践した。

表1 奥山(2020)が実施したアンケート項目

質問内容	
1	学校の授業以外で、英語や英会話の勉強をしています。
1-1	どのような教室や教材で、英語に関係する勉強をしていますか。
2	普段の生活の中で、英語に関わることはどれくらいありますか。
3	これまでに海外旅行をしたことはありますか。
3-1	どのような国や地域に行きましたか。
4	学校での英語の授業や活動は好きですか。(理由も)
5	学校での英語の授業や活動が得意ですか、苦手ですか。
6	学校での英語の授業や活動の中で、どのようなことが得意ですか。(複数選択)
7	学校での英語の授業や活動の中で、もっとできるようになりたいことは何ですか。(複数選択)
8	学校での英語の授業や活動の内容をどれくらい理解していますか。
9	学校での英語の授業や活動で、好きな活動は何ですか。(複数選択)
10	学校での英語の授業や活動で、やってみたいことは何ですか。(複数選択)
11	学校での英語の授業や活動の感想を自由に書いてください。

表2 タイプ別分類表

児童の分類	Q1. 好き	Q2. 学習経験	Q3. 得意
(a)	○	○	○
(b)	○	×	○
(c)	○	○	×
(d)	○	×	×
(e)	×	○	○
(f)	×	×	○
(g)	×	○	×
(h)	×	×	×

(2) 学習意欲の測定

児童の学級の授業場面における学習に関する文脈的意欲を測定するため、真田ら(2014)は新たに「学習意欲尺度」を開発している。「よくあてはまる(4点)」から「あてはまらない(1点)」の4件法を採用し、4件法の配点より、合計点数が高いほど、学習意欲が高い傾向の児童であると提起している。また、この尺度により、学習全般に対する児童の学習スタイルの好みや傾向を把握することができる。と考える。

表3 学習意欲尺度の質問項目

(1)授業が始まったら、すぐにノートをとることができている。
(2)先生の指示にすぐに従うことができている。
(3)次の学習に備えて、宿題をきちんとする。
(4)授業中、授業に関係のない話をしていない。
(5)授業開始のチャイムが鳴ったら、すぐに着席をすることができている。
(6)課題にすぐ取り組むことができている。
(7)むずかしい課題にもあきらめずに取り組むことができている。
(8)1人で課題に取り組む時間に、1人で集中して課題に取り組むことができている。
(9)自分の意見を発表することができている。
(10)わからないときは、先生に質問することができている。
(11)先生の説明や友達の見解に相づちをうつことができている。
(12)次に何をすればいいのかわからないときは、先生に質問することができている。
(13)先生や友達の見解について、なるほどと思った時にうなづきことができている。
(14)授業の終わりに、次の授業も頑張ろうと思う。
(15)クラスで学ぶ雰囲気はいごちがよい。
(16)授業の内容は興味がわき、ひきつけられる。
(17)学校の授業は楽しい。
(18)勉強の仕方が上手だと思う。
(19)よい成績をとることができると思う。
(20)授業で出された問題や課題をうまくできると思う。
(21)授業の内容を予習することができている。
(22)授業で学力がついていると感じる。

(3) 英語学習に対する情意要因の測定

カレイラ(2007)は、英語学習に対する情意要因を測定する Motivation and Attitudes Toward Learning English Scale for Children(MALESC)を使用している。MALESCは19の質問項目から構成され、「はい」(4点)から「いいえ」(1点)の4件法を採用している。カレイラ(2007)における4件法の配点より、点数が低い項目ほど、その項目が英語学習に対する情意要因として強く関わっているといえる。従って、この尺度により、英語の学習に対する児童の気持ちや目的などを把握することができると思われる。

表4 MALESCの質問項目

(1)英語の授業はとてものしいです。
(2)英語の授業のある日は楽しみです。
(3)習った英語をもっと使ってみたいです。
(4)もっと英語の授業があったほうがいいです。
(5)いろいろな外国にいつてみたいです。
(6)外国のお友達をたくさん作りたいです。
(7)英語が上手になって外国の人と話してみたいです。
(8)外国に住んでみたいです。
(9)外国のことをもっと知りたいです。
(10)中学校に入って英語の勉強で困らないように勉強します。
(11)大人になったら自分にとって必要になると思うので、英語を勉強します。
(12)将来やりたい仕事のために英語を勉強します。
(13)高校や大学に入るために必要なので英語を勉強します。
(14)うちの人は英語がとても大切だと思っています。
(15)うちの人は私が英語ができるようになることを望んでいます。
(16)うちの人は英語を一生懸命勉強しなさいといひます。
(17)英語の授業でみんなよりできないと心配です。
(18)英語の授業中は何となくいつも心配です。
(19)英語の授業で答えたり、発表するときどきどきします。

(4) 英語に対するイメージ記述調査

英語に対する印象について、単元の実施前後において記述による調査も実施した。表5は質問項目である。単元前のQ1~Q3は、児童の英語学習に対するニーズを把握し、授業づくりの参考とするためにこのような項目を設定した。特に、Q1、

Q2は、これまでの英語の授業に対する児童のイメージを確認すること、4技能の習得にあたって児童が難しいと感じる内容を把握することの二点を目的としている。Q3は児童が英語の習得にあたり、どのような目的や、必要感をもっているのか、その内容や質を把握することを目的としている。単元後のQ1、Q2は単元前との変容を比較するためにこのような内容を設定した。Q1は、筆者の授業を行ってからの英語の授業へのイメージや印象の変容を把握することを目的としている。Q2は、単元前のQ3と同一の内容で、授業を行ってからの英語の学習に対する目的や必要感の変容を把握し、次の単元の学習内容を検討する際の材料とすることを目的としている。具体的な回答の内容に関しては、後述の抽出児の分析内で扱うものとする。

表5 英語に対するイメージ記述調査の質問項目

授業前	
1. これまでの外国語活動・英語の授業の中で楽しかった思い出を書いてください。	
2. これまでの外国語活動・英語の授業の中で難しかったなと感じたことを書いてください。	
3. 将来英語を話せるようになったらどんなことをしたいですか？(どんな場面で英語を使っていきたいですか)	
授業後	
1. 本授業(奥山先生の授業)を通して英語の授業への印象はどのように変わりましたか？	
2. 将来英語を話せるようになったらどんなことをしたいですか？(どんな場面で英語を使っていきたいですか)	

(5) 分析の方法

奥山(2020)が実施した児童の英語学習に対するニーズを調査するアンケートを、本研究における単元の前に実施し、児童の英語学習に対するニーズを把握した。また、学習前の児童の学習意欲や英語学習に対する情意要因を把握するために、先述した真田ら(2014)とカレイラ(2007)の質問項目を使用したアンケート調査を単元前のみ実施した。その後、結果をもとにニーズを取り入れた授業実践を行った。先述した学習意欲の指導の留意点である「学習意欲は複雑な仕組みと働きをもち、変容を把握するためには学習者の心理状況を慎重に理解することが必要となること」から、数値上の比較ではなく、児童の内的な変容を捉える必要があると考えた。そのため、より児童の内的な心理現象を捉えようと試みた。単元内では振り返りを行い、単元後には英語学習に対するニーズを調査するアンケート、英語に対するイメージ記述調査を行った。これらのアンケートの結果を踏まえて、特徴的な抽出児の言動を分析する。分析する際には、記述内容の変容に注目する。

4 授業実践とその概要

(1) 日時：2020年10月12日～11月9日

(2) 対象：山形市内A小学校第6学年B組28名

児童は、2018年度に外国語活動、2019年度からは教科としての外国語を学習している。

(3) 教材 外国語科・NEW HORIZON Elementary English Course Unit5「We all live on the Earth」

(4) 目標

知識・技能
食物連鎖（フードチェーン）について伝えたい内容を整理し、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる。
思考力・判断力・表現力等
食物連鎖（フードチェーン）について発表するという単元終末に設定した具体的な課題に対し、情報を整理しながら発表したい題材やその構成について考え、自分の考えを英語で表現することができる。
学びに向かう力・人間性等
英語で伝え合うことの楽しさなどを実感しながら、食物連鎖（フードチェーン）について発表する、という単元終末に行う言語活動に向かって、見通しをもってグループごとに友達と協力して課題解決を行い、学習課題に対する自らの学びの様子や過程を振り返ることを通して、よりよい発表のために粘り強く学習に取り組もうとしている。

(5) 単元計画(全6時間扱い)

	主な学習活動
1	<ul style="list-style-type: none"> 動物名や自然の場所の言い方について、慣れ親しむ 単元の目標とゴールの活動(英語のプレゼン発表)を確認する やってみたい発表タイプを選択する
2	<ul style="list-style-type: none"> Where do ~ live?/ ~ live in .../ What do ~ eat?/ ~ eat .../ の表現に慣れ親しむ 発表タイプを最終決定する
3	<ul style="list-style-type: none"> Where do ~ live?/ ~ live in .../ What do ~ eat?/ ~ eat .../ の表現に慣れ親しむ ペアでキーセンテンスの練習をする
4	<ul style="list-style-type: none"> 全体でキーセンテンスの確認をする グループごと発表の構想を考える
5	<ul style="list-style-type: none"> 分からない単語の尋ね方を確認する グループごとに発表準備、練習をする
6	<ul style="list-style-type: none"> グループごとに発表の最終確認をする グループごとに発表する

(6) 単元の特徴

実施にあたり、学習意欲を高める手立てとして、

以下二点のような取り組みを行った。

一点目は、発表のための表現方法を自己選択する点である。ニーズをもとにした表現方法を提示し、その表現方法を自己選択・自己決定することが学習意欲へと繋がるのではないかと考えた。そのため、授業内では授業前に行った児童のニーズを調査するアンケートをもとに表現方法のタイプを考え、児童が選択できるようにした。タイプはA～Cの3タイプである。Aタイプは、発表で紹介する動物のイラストカードを示しながら発表する方法である(4技能のうち「話す」ことに重点を置いたタイプである)。Bタイプは、紹介する動物のイラストを1枚の画用紙に貼りつけ、動物名を英単語で書き込んだり食物連鎖の関係を矢印で示したりしながらポスターを作成し、それらを示しながら発表する方法である(4技能のうち「話す」と「書く」ことに重点を置いたタイプである)。Cタイプは、会話場面などのスキット形式で発表する方法である(4技能のうち「話す」こと-「やりとり」に重点をおいたタイプである)。これまでの外国語の授業では、一斉に同じ内容の学習を行うことがほとんどであった。しかし、授業前に行ったアンケートでは、一人一人の得意不得意や、やってみたい活動は異なっていた。そのため、教師が授業でねらいとすることとのズレが生じてしまうのではないかと推察する。英語でプレゼンするというゴールとなる言語活動は設定するが、発表のための表現方法や発表に向けての学び方を選択できるようにすることで、できる限り個人のニーズに応じた授業を目指したいと考えた。

二点目は、児童が学習の見通しをもつことができるようにした点である。具体的には、単元の1教時目に単元全体の学習計画表を配布し、終末に行う言語活動を提示、さらに授業冒頭ではToday's Goalとして毎時間めあてを示した。終末に行う言語活動の提示では、児童が発表の具体的なイメージをもつことができるよう、筆者と実習校の外国語専科教員、ALTの3名で発表のデモンストレーションを行った。これらの取り組みは、先述の本研究における学習意欲の定義である「学習者が学習それ自体を目標とし、学習を成し遂げようという意志に根ざした、自発的・能動的に学習に取り組む学ぼうとする気持ち。」とも関わってくることである。学習の目的や最終的に目指す活動を明確に示すことにより、「学習者が学習それ自体を目標

として学習に取り組むことが促されると考えられる。学習者自身がその学習におけるゴールのイメージをもって学習に臨むことができるようにしたいと考えた。

5 アンケート結果と抽出児の分析と考察

先述したアンケート調査及び授業実践をもとに、以下の抽出児の分析と考察を行う。

(1) 抽出児 A

①A 児の分析

A 児は特に通塾や市販の教材の利用は無く、学校の授業でのみ英語の学習を行っている児童である。表 1 に示したニーズを調査するアンケートにおいて、A 児は英語が好きであり、比較的得意であると捉えている。特に、4 技能のうち聞くことと話すことを得意としているが、おおよそ 4 技能全体への意欲を有している児童である。特に、外国の文化や生活について調べたり話し合ったりすることや、英語を使って表現したりすることを好み、単語を書くような活動を望んでいる。

学習意欲尺度において、88 点中 76 点であった。特に、表 4 で示した項目のうち、後述する B 児と比較すると、A 児はわからないときに先生に質問することができること、先生や友達の見解に対してうなずく等反応することができること、クラスで学ぶ雰囲気を感じ心地がよいと感じていることが特徴として挙げられる。

英語学習に対する情意要因を測定する MALESC において、外国に対する興味関心が高く、目標や目的のために英語を勉強するという意識があり、学習した英語をもっと使ってみたいとも思っている点が特徴として挙げられる。

英語に対するイメージ記述調査において、A 児は以下のように記述している。

【単元前】

Q3. 英語を話せるようになったらしたいこと：
読みたい英語の本を読む。外国の人と話す。

【単元後】

Q1. 英語学習に対する印象の変容：
もともと楽しいと思っていたが、もっと楽しく面白くなってきた。もっと色々な単語が知りたい。
Q2. 英語を話せるようになったらしたいこと：
外国の人と会話する。英語の本を読む。多くの外国の人に日本のことを知ってもらう。

また、A 児は、授業の振り返りを以下のように記述している。

【3 教時目】

食べるもの、住んでいる所の質問とそれに対する答えをしっかりと言えたからよかった。

【5 教時目】

英語で質問することができたし、プラスワン²⁾の言葉も言えるように練習できた。相手に分かるように発音してできた。

【6 教時目】

日本語でのプレゼンテーションは今までやってきてるのでそんなに難しくはないけど英語では初めてだし聞いている人に伝わるようにするのに工夫するのが大変だった。

②A 児の考察

A 児の単元後の英語学習に対する印象は「もともと楽しいと思っていたが、もっと楽しく面白くなってきた。もっと色々な単語が知りたい。」と記述している。つまり、単元の前から英語学習に対して面白さや魅力を感じており、単元を通して更なる面白さを発見していることから、奈須(1996)で述べられている、学習を進めていくうちに内発的意欲による学習が展開される「価値の内面化」が行われていることがわかる。

このような結果となった要因として、本単元の学習方法や内容が A 児の学習スタイルの好みやニーズに合うものだったのではないかと考え、以下三点のように考察した。

一点目は、学習スタイルに関する考察である。学習意欲尺度の結果より、A 児は周囲と関わりながら学習を進めていくことを好むような傾向が読み取れる。本単元では、単元終末の活動としてグループごとにプレゼンテーション形式での発表を設定した。グループで協力しながら発表準備・練習を行うことが求められる。A 児は、内容の構成や分からない単語について、グループのメンバーや周囲の教員に積極的に尋ねる様子が見られた。学習者の好む学習環境と授業内の環境が類似することで、より自発的・能動的に学習に取り組もうとする気持ちが引き出されると考察する。

二点目は、学習者のニーズに関する考察である。ニーズを把握するアンケートより、A 児は単語を書く活動を望んでおり、英語を使って表現することを好んでいる。本単元では、タイプ B のように話すことと書くことを重視した発表の表現方法を選択することが可能であり、プラスワンの言葉や表現も使えるように声掛けを行った。A 児はタイプ B を選択し、生き物の名前を複数食物連鎖に取

り入れながら、ポスターに単語を書き込む様子が見られた。さらに、5 教時目の振り返りより、プラスワンの言葉を入れて練習を行っていたことが分かる。学習者のやりたいという思いと合うような学習を選択することができる環境や条件を揃えることで、学習前から意欲的な児童の意欲が担保されると考察する。

三点目は、学習者が見通しをもつことに関する考察である。MALESC の結果より、A 児は目標や目的のために英語を勉強するという意識があり、学習した英語をもっと使ってみたくも思っている。本単元では、授業冒頭にて単元のゴールとなる活動を明確に示した。その結果、A 児は単元終末の表現活動を意識し、先述した本研究における学習意欲の定義のように「学習者が学習それ自体を目標」として学習に取り組むことができていたのではないかと考える。単元終末に行うゴールの活動や学習の流れを、事前に学習者と共有することで、学習者が見通しをもつことができ、学習することを目標として取り組むことができると考察する。

(2) 抽出児 B

① B 児の分析

B 児は学習塾に通っており、市販の教材などでも英語の学習を行っている児童である。表 1 に示したニーズを調査するアンケートにおいて、B 児は英語が比較的好きであり、英語が得意であると捉えている。特に、4 技能のうち聞くことと書くことを得意としている児童である。授業の感想は以下のように記述している。

【単元前】：授業でくわしく説明されていて良いと思う。

【単元後】：英語の授業が好きなきもあれば、気が乗らないときもある。この学習が好きでもなく嫌いでもない。

B 児は少し難しい内容の英語を聞いて理解できるようになりたいと思っており、読むことや書くことも好んでいる。学習内容や英文法に関する詳しい説明を好ましいと感じている。

学習意欲尺度において、88 点中 54 点であった。特に、表 4 で示した項目のうち、先述した A 児と比較すると、B 児は次の学習に備えて宿題をきちんとすること、課題にすぐ取り組むことができていること、1 人で課題に取り組む時間に 1 人で集中して課題に取り組むことができていることが特徴として挙げられる。

英語学習に対する情意要因を測定する MALESC

において、B 児は全ての項目において「まあまあ：2 点」と回答している点が特徴的である。

英語に対するイメージ記述調査において、B 児は以下のように記述している。

授業の振り返りとして B 児は以下のように記述している。

【3 教時目】

生き物の食べる住むことについてのたずねる文を言い合えたから良かったし、それに対する応答もできた。

【5 教時目】

プラスワンを考えることができたし、ポスターを完成させた。

【6 教時目】

住んでいる場所、食べ物、虫の名前等分からない単語も知ることができたし、相手に日本語で何というかな等の聞き方も知れて良かった。

② B 児の考察

B 児の単元後の英語学習に対する印象は「特に変わっていない。(好きでも嫌いでもなく)」と記述している。さらに、単元後の感想でも「英語の授業が好きなきもあれば、気が乗らないときもある。この学習が好きでもなく嫌いでもない。」と記述している。このような結果となった要因として、本単元の学習方法や内容が B 児にとってそぐわないものだったのではないかと考え、以下のように考察した。

一点目は、学習スタイルに関する考察である。学習意欲尺度の結果より、B 児はグループや友達と一緒に学習を進めていくことよりも、一人で黙々と進める学習スタイルを好んでいたのではないかと推察する。本単元では、単元終末の活動としてグループごとにプレゼンテーション形式での発表を設定した。グループで協力しながら発表準備・練習を行うことが求められる。その結果、B 児が好む学習スタイルとのズレが生じたため、単元後の英語学習に対する印象の変容までは繋がらず、好きでもきらいでもない、といった状態になったのではないかと推察する。学習内容に関するニーズを把握するだけでなく、学習意欲尺度などを用いた、学習者の好む学習環境を把握することも必要であると考察する。

二点目は、学習者のニーズに関する考察である。ニーズを把握するアンケートより、B 児は少し難しい内容の英語を聞いて理解できるようになりたいと思っており、英文法の学習をやってみたくと

述べている。本単元ではプレゼンテーション形式での発表に向けた単語練習やキーセンテンスの練習、グループ単位での発表練習を行った。その結果、B児の求めとはズレが生じ、奈須(1996)の「価値の内面化」が行われなかったため、単元後の英語学習に対する印象の変容が見られず、好きでも嫌いでもない、といった状態になったと推察する。ニーズを把握するアンケートの結果をもとに授業実践を行う際には、取り入れたニーズにそぐわないニーズをもつ学習者も必ず存在し、その学習者にとっての面白さや楽しさに繋がりにくいという点に留意することが必要であると考察する。

一方で、先述した単元後の感想において「英語の授業が好きなきもあれば、気が乗らないときもある。」とも記述している。英語学習に対する印象の変容が見られなかったB児だが、全く楽しさや面白さを感じていなかったわけではないと捉え、その要因を以下のように考察した。

先述した6教時目の振り返りにおいて、分からない単語や聞き方を知ることができてよかった、という内容を記述している。授業前半は全体での活動時間とし、単語の確認や尋ね方の練習などを行った。その結果、学習内容や文法の詳しい説明を好むB児は、新しい単語や尋ね方を知ることが出来たことに対し、達成感や楽しさ、面白さを感じ、「英語の授業が好きなきもあれば、気が乗らないときもある。」のような記述になったと推察する。B児のような児童も楽しさや面白さを感じることができるためには、グループごとの発表練習のような時間だけでなく、授業前半に行ったような知識の確認や習得を目指す活動も合わせて行うことが必要であると考察する。

(3) 総合考察

育成を目指す資質・能力の三つの柱に関して、2017年告示の小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編(以下、解説外国語という。)では、次のようなことが述べられている。「知識及び技能」の育成に関わることとして、高学年では発達の段階に応じ、言語能力向上の観点から言葉の仕組みの理解を促す指導が求められている。B児のニーズと照らし合わせると、B児は、新たな単語や文法を知ることやその説明を好んでおり、指導要領で述べられているような指導も取り入れていくことが必要である。「思考力、判断力、表現力等」の育成に関わることとして、解説外国語において中

央教育審議会答申は、「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成していく過程」の必要性を示している。本実践における授業と照らし合わせると、4, 5, 6教時目に行ったグループごとに発表準備や練習を行う活動にあたる。コミュニケーションの見通しを立てる過程において、児童が単独で行うことも出来るが、集団として考えをまとめ、創り上げる活動を設定することも必要である。

以上のことより、表現活動を行う際には、言語能力向上や4技能の習得を目指し、知識を習得するような時間が必要であると同時に、習得した知識を活用して自己の考えを整理して表現しようとしたり、集団としてどのように表現するのか検討したりする時間が、バランスよく取り入れられていることが必要であると考察した。また、B児のような児童の意欲をさらに引き出すためには、例えば、授業前半の知識を習得する時間において、辞書やタブレット端末を使用し、児童が自ら単語の意味を調べることができるようにすることも可能である。ニーズを把握することで、より個に応じた手立てを講ずることができ、学習に対する意欲を高めることに繋がると考える。

6 おわりに

(1) 本研究の成果

本研究の成果として明らかになった学習意欲を高めるための、重要な実践上の視点を二点述べる。一点目は、A児の分析・考察より、児童の学習に対するニーズを取り入れた活動を行うことで、もともと学習に対して意欲的な児童の意欲も持続させることができるということである。その際、児童の学習スタイルの好みや学習に対するニーズが、授業内容や活動と一致していると児童は面白さや楽しさを感じやすく、それらを積み重ねることで学習意欲の向上へ結び付くと明らかになった。二点目は、A児とB児の分析・考察より、授業内で、言語能力向上や4技能の習得を目指して知識を習得するような時間と、習得した知識を活用して自己の考えを整理して表現したり、集団としてどのように表現するのか考えを形成したりする時間が必要だということである。両者をバランスよく取り入れることが重要である。

(2) 課題

本研究の課題を二点述べる。

一点目は、実践上の課題である。B 児の分析・考察より、全ての児童のニーズに応えることは難しく、学習内容とニーズのズレによって学習に対する意欲を引き出すことができない場合もあるということが明らかになった。しかし、そのような児童も意欲が無いとは言いきれない。学習に対するニーズを把握し、可能な限り個に応じた手立てを講ずることが必要である。二点目は、研究上の課題である。A 児と B 児以外の児童の中には、振り返りや感想等の記述が少ない児童やほとんど見られない児童も一定数存在し、意欲の変容を把握することが困難な場合があった。鹿毛(2008)は、意欲は様々な要因が関わって起きる心理現象であると述べている。鹿毛の論より、学習意欲の高まりには様々な要因が関係するため、複数の調査方法による継続した把握を試みる必要がある。また、鹿毛(2008)は『意欲』というのは、現れては消えていく心理現象の一つであると論じている。鹿毛の論より、学習意欲の変容を調査するにあたり、学習意欲は短絡的に測定できるものではなく、既存の尺度の結果だけで意欲の有無や変容を判断するのは危険であると考え。児童の心理状況を慎重に理解していくことが必要である。

注

- 1)4 技能とは、英語教育における、聞く、話す、読む、書くという 4 つの力のことである。
- 2) プラスワンとは、単元の表現活動において、キーセンテンスに加えて、既習表現を用いた言葉やフレーズのことである。

引用文献

- 阿濱志保里・阿濱茂樹・霜川正幸(2018)「学習者ニーズに関する基礎的研究」、『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』, 第 45 号, pp. 121-127.
- 今井裕之(2018)「2019 年度以降の小学校英語の課題への取り組み」, 平成 30 年度三重の英語教育改革加速事業モデル校実践事例集, <http://www.pref.mie.lg.jp/GAKOKYO/HP/p0014200018.htm>(最終閲覧日:2021 年 1 月 25 日)
- カレイラ松崎順子(2007)「日本の小学生の英語に対する動機・態度と英語の熟達度との関係-児童

英検参加者の分析を通して-」, 英検研究助成報告書, 第 19 回.

- 鹿毛雅治(2004)『動機づけ研究』へのいざない, 上淵寿編著『動機づけ研究の最前線』, 北大路書房, pp. 1-25.
- 鹿毛雅治(2008)「学習意欲の構造から見た学校が取りうる方策-『状況意欲』に着目して教育環境のデザインを-」, ベネッセ教育総合研究(2008)『BERD』, No. 13, <https://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/b2008.html#berd13>(最終閲覧日 2020 年 12 月 3 日)
- 鹿毛雅治(2015)『学習意欲の理論-動機づけの教育心理学-』, 金子書房.
- 北尾倫彦(2020)『「深い学びの科学」-精緻化, メタ認知, 主体的な学び-』, 図書文化社.
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語活動・外国語編』, 開隆堂.
- 文部科学省(2016)「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ報告」, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_5.pdf(最終閲覧日 2021 年 1 月 28 日)
- 奈須正裕(1996)『学ぶ意欲を育てる-子どもが生きる学校づくり-』, 金子書房.
- 奥山智晶(2020)「小学校外国語科(英語)における意欲を高める授業づくり-学習に対する児童のニーズを重視した指導の視点から-」, 『山形大学大学院教育実践研究科年報』, 第 11 号, pp. 220-223.
- 桜井茂男編(2004)『たのしく学べる最新教育心理学教職にかかわるすべての人に』, 図書文化社.
- 真田穰人, 浅川潔司, 佐々木聡, 貴村亮太(2014)「児童の学習意欲の形成に関する学校心理学的研究-学習規律と学級適応感との関連について-」, 『兵庫教育大学教育実践学論集』, 第 15 号, pp. 27-38.
- 下山剛, 林幸範(1983)「学習意欲の類型に関する研究」, 『日本教育心理学会総会発表論文集』, 第 25 巻, pp. 436-437.
- Enhancing Children's Motivation Through Lesson Planning in Elementary School Foreign Language Departments : A Teaching Perspective That Emphasizes Children's Learning Needs*
Chiaki OKUYAMA